

出雲国造と変若水

和田
翠

Izumo Kokuzo and Ochi-mizu

- ①『万葉集』にみえる変若水
- ②常世神
- ③多度山の美泉
- ④出雲国造神賀詞の分析——第一段——
- ⑤出雲国造神賀詞の分析——第二段——
- ⑥出雲国造神賀詞の分析——第三段——
- ⑦出雲国造神賀詞の分析——第四段——
- ⑧出雲国造神賀詞の成立年代
- ⑨出雲国仁多郡の御澤
- ⑩結語

【論文要旨】

日本の古代には若返りの水、すなわち変若水に対する信仰が存在した。『万葉集』には、ヲツ・ヲチの表現が十一首・十二ヶ所にみえ、變若・變・若・越・越知・遠知などと表記しており、ヲチ水は月や常世にあると觀念されていた。ほかにも若返りに関わる史料として、皇極三年（六四四）に大生部多が東國から畿内にまで広めた常世虫の信仰、水江浦嶋子の伝承、靈龜三年（七一七）十一月十七日の養老改元の詔にみえる多度山の美泉などの事例があつて、これまでにも様々に論じられてきた。しかし出雲国造に関わる變若水については、ほとんどふれられていない。小論では、出雲国造神賀詞の詞章を分析し、延喜臨時祭式三六条の神寿詞条にみえる献物と対応させることで、新任された出雲国造が出雲国仁多郡の三澤で汲んだ水を、変若水として天皇に献じた事実を明らかにする。

出雲国造神賀詞の第四段では、神賀詞奏上に際して出雲国造が天皇に献納する各種

の献物について、修辞をこらした詞章が述べられている。ただし神賀詞の「彼方の古川岸、此方の古川岸に生ひ立つ若水沼間の、いや若えに御若えまし、すすぎ振るをどみの水の、いやをちに御をちまし」とみえる詞章については、延喜臨時祭式三六条の神寿詞条に対応する献物がみあたらない。これまで、この部分の詞章を変若水の事例とする解釈はほとんどないが、出雲国造が天皇に変若水を奉獻したと理解しうる。この変若水は『出雲国風土記』にみえる仁多郡の三澤の水であり、当該条の問題点とともに、三澤の地についても現地調査をも踏まえて、私見を述べる。また出雲国造が天皇に変若水を奉獻した歴史的意義や、変若水がどのように用いられたのか、などについても言及する。